

太宰治『粹人』論

——決戦下の〈虚栄〉——

* 舘 下 徹 志

Tetsushi TATESHITA

A study of Dazai Osamu's "Suijin"

"Vanity" under the decisive Wartime

はじめに

井原西鶴の第一遺稿集『西鶴置土産』（元禄六・一六九三年刊）の「序」には、遊里における日常がそこに関わる人々の立場ごとに素描されている。

世界の偽かたまつて、ひとつの美遊となれり。是をおもふに、真言をかたり揚屋に一日は暮がたし。女郎はなひ事をいへるを商売、男は金銀を費ながら氣のつきぬるかざりごと、太靴はつくりたはけ、やりてはこは顔、禿は眠らぬふり、宿のかゝは無理笑ひ、かみする女は間ぬけの返事、祖母は腰ぬけ役に酒の横目、亭主は客の内証を見立てけるが第一、それぐに世を渡る業をかし。

西鶴の造語とされる「美遊」とは、「内証」の許すかざり「金銀を費」やす訪問者と、「かざりごと」に腐心する店側の「偽」とが織りなす、底知れぬ虚構空間を舞台にした遊興のことである。「悪所」とも呼ばれ、幾重にも欲望が渦巻く遊里は、すべては金次第という一面を持つ非情な場でもあった。「紀の国屋蜜柑のやうに金をまき」と川柳に詠まれた掛け値なしの大尽ならばともかく、懐具合を気にしながら遊里に通う多くの者たちにとって、金の力で「美遊」の主導権を握りつづけることは容易なことではない。客がその虚栄心を満たすための無理な演技を強いられる一方で、それにつけ込むことを業とする迎える側の手練手管はいよいよ磨かれる。

太宰治の短編小説集『新釈諸国噺』（昭和20・1、生活社）に書き下ろし作品として載る『粹人』は、浪花の茶屋で見た主人公の気取りが仇となる物語である。裕福な「粹人」として周りから一目置かれたい男が、「粹」を演じ

そこね、不本意にも野暮の典型に転げ落ちる。虚栄心にしがみつく人間の哀しさやおかしさを映し出す滑稽小説といえよう。

この小説の原典は、井原西鶴『世間胸算用』（元禄五・一六九二年刊）所収の「訛言も只はきかぬ宿」（巻二・二）で、「茶屋」の「噂」と「女」が見せる客あしらいの巧みさと、それに乘せられて醜態をさらす「商人」のみじめさと鮮やかな対照をなす佳編と評価されている。太宰はこの作品の大筋を生かしながらも、人物の顔を中心とする身体表現を深化させたり、心の内を描き出したりすることで差異化を図っていた。その手法が『粹人』をどのような小説作品に作り上げているのか、また、描かれた作品世界が時代とどのように関わることについて、先行研究に学びながら考えてみたい。

一

かつて大晦日は盆前とともに、「掛取」をめぐる攻防が繰り広げられる日であった。江戸中期の川柳に描かれた「大晦日」の風景を少々たどってみよう。借り手は借財の事実を感ずる。だが、無い袖は振れない。そこで、ひたすら謝りとおしたり（掛取が帰つたあとでふといやつ）、仮病を使つたり（掛取が来ると作兵衛うなり出し）、無用の外出をしたり（にげてつてよそのくいこみこしらへる）と、難から逃れるための手立てを探すことになる。ときには、「あやまつて居るうち春にあらたまり」のように、年越しという一時的な時効の成立に救われることもあったのだろう。落語の「にらみ返し」では、家主に雇われた男が無言を貫き、睨みをきかせるだけで掛取を次々に追い

払うという大晦日の一場面が演じられる。不気味な沈黙が、言葉のやりとりで成り立つ日常を無効化するのである。

返済を迫る側も必死だ。常套手段である居留守への対策として、「つかはれぬやうにかけ取りひよつくら来」というような意表を衝く訪問はもとより、助っ人の助力に頼る威圧行為も辞さない（「大三十日首でも取つて来る気也」、しまいに「その執念はすさまじく（「大三十日首でも取つて来る気也」）、しまいに「ふつけして上る掛け取りすばらしい」と戦術の巧みに呆れるほかない。

古語の「出違ふ」は、「入れ違いに出る」という基本的な意味から派生して、「借金取に掴まらぬよう外出すること」を指すようになった動詞である。『粹人』の「男」が思いついた大晦日の難逃れの法こそ、この「出違ふ」ことだった。

「ものには堪忍といふ事がある。この心掛けを忘れてはいけない。ちつとは、つらいだらうが我慢をするさ。夜の次には、朝が来るんだ。冬の次には春が来るさ。きまり切つてゐるんだ。世の中は、陰陽、陰陽、陰陽と続いて行くんだ。仕合せと不仕合せとは軒続きさ。ひでえ不仕合せのすぐお隣りは一陽来復の大吉さ。ここの道理を忘れちやいけない。来年は、これあ何としても大吉にきまつた。その時にはお前も、芝居のvari目ごとくに駕籠で出掛けるさ。それくらゐの贅沢は、ゆるしてあげます。かまはないから出掛けなさい。」などと、朝飯を軽くすましてすぐ立ち上り、つまらぬ事をもつともらしい顔して言ひながら、そそくさと羽織をひっかけ、脇差さし込み、けふは、いよいよ大晦日、借金だらけのわが家から一刻も早くのがれ出るふんべつ。家に一銭でも大事な日なのに、手箱の底を搔いて一歩金二つ三つ、小粒銀三十ばかり財布に入れて懷中にねぢ込み、「お金は少し残して置いた。この中から、お前の正月のお小遣いをのけて、あとは借金取りに少しづつばらまいてやつて、無くなつたら寝ちまへ。借金取りの顔が見えないやうに、あちら向きに寝ると少しは気が楽だよ。ものには堪忍といふ事がある。けふ一日の我慢だ。あちら向きに寝て、死んだ振りでもしてゐるさ。世の中は、陰陽、陰陽。」と言ひ捨てて、小走りに走つて家を出た。

上調子な語りが招き寄せる言葉の軽薄さは、男の逃げ腰と見合っている。「心

掛け」や「道理」を説くことも、「贅沢」や「正月のお小遣い」という甘言をちらつかせることも、「借金だらけのわが家から一刻も早くのがれ出る」ための口実にすぎないことは明白であろう。斎藤理生が指摘するように、「女房の沈黙」が男の「言葉の空疎さ、論理の脆弱さ」を「際立たせ」ている。「訛言も只はきかぬ宿」には「機嫌の悪るい内儀」と書かれた妻の様子に触れることなく、『粹人』の語り手は男の見え透いた空言と、応答を拒むかのような焦りを冷笑的に捉える。その焦りようは、「懸乞の貌を見ぬやうに、此方向きて寝て居やれ」という一節が、「借金取りの顔が見えないやうに、あちら向きに寝ると少しは気が楽だよ」と置き換えられたことで強調された。「此方」ではなく「あちら」を向くよう勧めた『粹人』の男は、すでに戸口近くにおいて、気もそぞろに物の道理を説いていることになるのである。

大晦日にあつて、債務の履行は世間への義理を果たすことと同義だった。貨幣経済の成立後、「元日より胸算用油断無く、一日千金の大晦日を知るべし」（『世間胸算用』序）という訓戒は、誰もが頭では理解している鉄則であったろう。掛け買という信用を基盤としたやりとりは、後払いの約束への裏切りを許さない共同社会の掟によって支えられていた。したがって、ひとたびその義理を欠けば、共同社会から何らかの制裁を受けなければならない。「義理詰め」と呼ばれていた引くに引かれぬ状況を想定しつつ、「油断無く」経済活動を続けることが求められていたのである。しかし、理念はそのまま現実とはならないこともある。借財に追われるつらい現実から逃れることが『粹人』の男のねらいだった。妻には「我慢」を強いながら、男は出違いついでに茶屋遊びをもくろむ。分別のない者が分別顔を装い、内証の怪しい者が長者のふりをするおかしさ、哀しさがこの小説の粹組みを形作っている。

分別にせよ金にせよ、ないものがあるように見せるには嘘をつくほかない。家を出た男が「急にむづかしき顔して衣紋をつくるひ、そり身になつてそりそり」と歩いて、物持の大旦那がしもじもの景気、世のうつりかはりなど見て廻つてゐるみたいな余裕ありげな様子」を演じるのはすべて、花街での遊興に気分よく「うつつを抜かす」ためであった。心の内では見境もなく、「あはれけふ一日の大難のがれさせ給へ、たすけ給へ」と「あらゆる神仏」に祈りを捧げる男が恐れているのは、内証が明るみとなり、不義理の者と見なされ、なじられることなのだろう。その意味で、「関係にからめとられてついに自尊心を

放擲出来ぬ男」という木村小夜の評言は正鵠を射ている。他者の眼差しが気になるからこそ、借金で首が回らない自己を粉飾し、人がましさをことさらに誇示しなければならぬ。危機に臨んで居直るだけの剛胆な氣質を、『粹人』の男は持ち合わせていないのだ。

仮にこの読み物が商人としての正道を主題とする立志伝や孝子伝であれば、ここでこの男に、現実を直視し、他者からの合理的な非難を受け容れて、信用の回復に努めるきっかけを与えるはずである。致富という目標を見定めるための教訓譚に転じる余地は十分にあった。だが、西鶴は「一日一物物の足らぬ拵へ、己れも合点ながら俄かに分別も成り難し」と、このままでは立ちゆかないとわかっているにもかかわらず「人間」の姿を描き出した。そして太宰も、そのような心弱い「人間」のおかしさを増幅させたのだった。

二

一見の客として「薄汚い茶屋の台所口からぬつとはひり」込んだ男はまず、『婆はゐるか』と大きく出た。この居丈高な態度を演技の基調に据えたのである。ここから読者はしばらく、作中の「婆」とともに、「粹人」の能弁な自己顕示に付き合わされることになる。男がくどくどと述べるのは、長者ゆえの意外な気苦労についてであった。

茶屋の台所に「取りちらかしてある書付け」を目ざとく見つけた男は、その総額を「三、四十両」と見積もる。

世はさまざま、しめて三、四十両の支払ひをすまず事も出来ずに大晦日を迎へる家もあり、また、わしの家のやうに、呉服屋の支払ひだけでも百両、お金は惜しいと思はぬが、奥方のあんな衣裳道楽は、大勢の使用人たちの手前、しめしのつかぬ事もあり、こんどは少しひかへてもらはなくては困るです。

金に飽かして「奥方」は「衣裳道楽」に耽っているという。それが「困る」のは、儉約を旨とする商家の風儀に合わないからだ、という男の愚痴は、「しめて三、四十両の支払ひをすまず事も出来ずに大晦日を迎へる家」との差を見せつけるための自慢話となる。『世間胸算用』の「商人」は「取り乱したる書出し、千束の如し」と、「千束」から連想される恋文と目の前の請求書（「書出し」

という取り合わせをおもしろがっていた。一方、『粹人』の男はそのような修辭に遊ぶことなく、金だけを量りにして、格の違いを印象づけることに懸命だった。「たまには、こんな小さい店で、こつそり遊ぶのも悪くない」などと、取り巻きを従えたにぎやかな遊興の日々に飽き飽きした様子すら匂わせる。無論、上客への丁寧な接待を促す暗示である。

男は大晦日に外出した理由を、「奥方」が「産気づいて、早朝から家中が上を下への大混雑」となり、「旦那様は、こんな時には家にゐぬものだと言はれ」たからだと言ふ。ここでもさらに身代の大きさをほめかす誇示が続く。「生れぬさきから乳母を連れて来るやら、取揚婆を三人も四人も集め」るだけでなく、「山伏」には「祈禱」をさせ、「医者」には「早め薬」を煎じさせたうえに、「子安貝、海馬、松茸の石づき」など「安産のまじなひ」を「四方八方に使ひを走らせて取寄せ」る。これらの叙述はほぼ原典に拠っているが、『粹人』の男はそうした過剰な支度を見て、「つくづく金持の大袈裟な騒ぎ方にあいそがつきました」と嘆き、「だいたい、大長者から嫁をもらったのが、わしの不覚」と反省してみせるのだった。後ろ楯となり得る「奥方」の実家まで「大長者」とあつては、それが事実だとすれば、男の経済的信用は揺るぎないかに思われる。こうして、架空の身代をめぐる長話は、その証拠としての気前のよさを示すことで仕上げに入る。

まるでこれでは、借金取りに追はれて逃げて来たやうな形です。けふは大晦日だから、そんな男もあるでせうね。気の毒なものだ。いったいどんな気持だらう。酒を飲んで酔へないでせうね。いやもう、人さまざま、あはははは。と力の無い笑声を發し、「時にどうです。言ふも野暮だが、もちろん大晦日の現金払ひで、子供の生れるまで、ここで一日あそばせてくれませんか。たまには、こんな小さい家で、こつそり遊ぶのも悪くない。おや、正月の鯛を買いましたね。小さい。家が小さいからつて遠慮しなかつていいでせう。何も縁起ものだ。もつと大きいのを買つたらどう？」と軽く言つて、一歩金一つ、婆の膝の上に投げてやつた。

斎藤理生は引用前半の危惧や憐憫の表明に、「語る内に内情をさらけ出してゆく」という「一篇の基本構造」を読み取る。男の饒舌は自分にとって都合の

よい虚構世界を創ることが目的だった。妻も茶屋の人々もそれで籠絡できるならば、大晦日の一日をうまく乗り切ったことになる。しかし、その思惑は外れる。妻の沈黙、「婆」の巧言令色、芸者「蕾」のいやみと、質は異なるものの、出任せの虚言への厳しい応答が待っていた。「酒を飲んでも酔へない」、「気の毒な」男の姿は予見されていたといえよう。

「二角」や「万金丹」という異称もある「一步金」（二分金）は、一両の四分の一の交換価値を持つ金貨だった。「さて多く替は色宿いろやどのならひ、人の情は一分小判あるうちなり」（井原西鶴『好色五人女』巻一「姿姫路清十郎物語」）とばかりに、男は「二二三つ」しか持ち合わせぬうちの一枚を「婆」に与える。上客として遇されることへのこだわりは、「大尽」気取りの裏づけとして、金に鷹揚な振る舞いを自らに強いることとなるのである。

三木清は『人生論ノート』の一節で、「虚栄心」を「自分があるよりも以上のものであることを示さうとする人間的なパッションである」と定義したうえで、「虚栄は人間的自然における最も普遍的な且つ最も固有な性質である」と言い切る。他者から称賛を受け、優越感に浸りたいという欲求が昂じるとき、実体とは懸け離れた自己像の捏造が始まる。三木清はそうした捏造を「仮装」と呼ぶ。『粹人』の男の「仮装」は、その「パッション」の裏におびえを抱えていたにちがいない。西鶴が活躍した時代からおよそ百年後、アダム・スミスは「虚栄」について次のような見解を示していた。

高慢な人と虚栄的な人は、たえず不満足である。前者は、他の人びとの不当な優越性とかれが考えるものへの、義憤によって苦しめられる。後者は、かれの根拠のない僭称が暴露することにもなうだろうとかれが予見する、恥辱をたえず恐怖している。

分不相応な称賛を得ることを目指しておきながら、素性を見破られることの怖れにおののくという「虚栄的な人」の自己意識は、いつかは訪れるであろう破滅の時を先取りしている点において「高慢な人」のそれと区別される。「虚栄的な人」である『粹人』の男は、「根拠のない僭称が暴露すること」を慎重に避けつつ、権柄けんがらずくな態度のまま、一日かぎりの「粹人」を演じ切らなければならぬ。

三

虚栄の芝居に登場する第一の共演者は、茶屋の「婆」である。『粹人』では、原典にはないその内言が詳しく書かれている。男の長台詞のあと、「さてさて馬鹿な男だ、よくもまあそんな大嘘がつけたものだ、お客の口先を真に受けて私たちの商売が出来るものか」と、品定めの人としての矜持を見せ登場する婆は、男の嘘を見抜いているという点で読者と同じ位置にいる。ここに、時折批評的に介入する語り手も含め、男の愚かしさを凝視する共犯関係が成立する。つまり、男の「根拠のない僭称」が潜在的に発覚したところから、この大晦日の芝居は開幕するのである。

心の内とは裏腹に、婆の言葉や振る舞いは、男が思い描く筋立てを先読みするかのように懇切を極める。「男の「粹人」物語を、婆は受け入れるふりをする」ことで「利用する」（斎藤理生）のであるが、それはまさしく近世語で言う「粹転すいせん」にあたる。「遊所のことばで、客を粹人としてあつかい立てたふうをしながら、術中に入れて、みずからの都合のよいようにしてしまうこと」（『角川古語大辞典』第三巻）を意味する「粹転」とは、相手をおだて上げ、下にも置かないもてなしを繰り返す、多くは金目当ての戦略的接待のことだった。

「やれうれしや、」と婆はこぼれるばかりの愛嬌を示して、一步金を押し出したとき、「鯛など買はずに、この金は亭主に隠して置いて、あたしの帯でも買ひませう。おほほほ。ことしの年の暮は、貧乏神と覚悟してゐたのに、このやうな大黒様が舞ひ込んで、これで来年中の仕合せもきまりました。お礼を申し上げますよ、旦那。さあ、さあ、どうぞ。いやですよ、こんな汚い台所などにお坐りになつていらしては。洒落すぎますよ。あんまり恐縮で冷汗が出るぢやありませんか。なんぼ何でも、お人柄にかかはりますよ。どうも、長者のお旦那に限つて、台所口がお好きで、困つてしまひます。貧乏所帯の台所が、よつぽどもの珍らしいと見える。さ、粹すいにも程度がございます。どうぞ、奥へ。」世におそろしきものは、茶屋の婆のお世辞である。

婆は長年の経験から、「粹人」もどきの客も自在にあしらうことができる。相手の心底を見通し、時には操る職能者として、茶屋に足を運ぶ客が何を望み、

何を喜び、どうすれば金離れがよくなるのかを熟知しているのだ。それゆえ、遊里における玄人たちへの敬意を忘れ、居丈高にその場の主導権を握ろうとする素人を、婆が許すはずはない。「洒落すぎますよ」、「お人柄にかかはりませんよ」、「粋すゐにも程度がございます」という穏やかな叱責が、男の「粋人」気取りをくすぐる効果は大きい。だが、それらは実のところ、「洒落」がわかる、「お人柄」のよい、「粋」を弁えた人に対してのみ通用する言葉であり、男の嘘をさりげなく暴き立てる虚言だともいえる。婆の攻撃は徐々に、男の拠点である「粋人」としてのあり方にまで及ぶだろう。「こぼれるばかりの愛嬌」の裏には、底知れぬ侮蔑が潜んでいたといわねばならない。

食通を気取り、「何しろたべものには、わがままな男ですから、そこは油断なく、たのむ」と「どうにもきざな事を言った」男に、婆が酒とともに供したの「うで卵」だった。原典には、「樽の酒の爛するも可笑し」とだけあり、語り手は、樽詰めの酒を汲み出し爛をつけるという「鼻かか」の厚遇ぶりを茶化していた。男を上客扱いする演技のさもらしさが笑えるというのであろう。『粋人』の婆の意図とは、「たべものの味がわかる顔かよ」、「料理などは、無駄な事だ」という見下す気分を具体化することだった。「樽の酒の爛する」のとは違つて、男に真意を悟られかねない、手の込んだ饗応といえる。

男は、へんな顔をして、

「これは、卵ですか。」

「へえ、お口に合ひますか、どうですか。」と婆は平然たるものである。

男は流石に手をつけかね、腕組みして渋面つくり、

「この辺は卵の産地か。何か由緒があらば、聞きたい。」

婆は嘖き出したいのを怵へて、

「いいえ、卵に由緒も何も。これは、お産に縁があるかと思つて、婆の志

それにまた、おいしい料理の食べあきたお旦那は、よく、うで卵などに召し上りますので、おほほ。」

「それで、わかつた。いや、結構。卵の形は、いつ見てもよい。いつその事、これに目鼻をつけてもらひませうか。」と極めてまづい洒落を言った。

肝の据わつた婆の口車に乗せられて、男はただの「うで卵」を肴に杯を重ね

るほかない。もちろん婆は「奥方」の出産という男の嘘を見破っていた。そこで、その嘘につけ込み「婆の志」の熨斗を添えたふりをして料理の手間や経費を省き、さらには、舌が肥えた御仁の「酔興」というありがちな巷説も絡めて、男の疑いの芽を摘むのである。この周到な籠絡はしかし、「婆はゐるか」に始まる男の「粋人」気取りの演技に起因することを忘れてはならない。一日限りの虚栄心を発動させた男にとつて、茶屋の人々からの歓待以外に救われる方法はなかった。男が目算を誤つたのは、富裕な身代の幻想といくばくかの金さえあれば、その歓待は約束されると思ひ込んだことによるのだろう。

言語学者のエミール・バンヴェニストは、インドヨーロッパ語の「制度語彙」の起源に関する研究の中で、「客人歓待制度」の語彙を取り上げている。それによれば、この制度の土台を成すラテン語の「*hostis*」とは「*互酬関係にある者*」のことであるが、それは「客人」と「敵」(「*hostis*」)という相反する意味を持つという。「*好ましい他所者*→客人」、*「敵対する他所者*→敵」という現れ方の違いが、英語で言えば、*hospitality* と *hostility* への分化をもたらす。茶屋の側から見れば、そこを訪れる「客人」はもれなく、「他所者」であり、「互酬関係にある者」である。「客人」は「*歓待*」(*hospitality*)を求めるが、それは無条件に約束されたことではない。常に異人としての不可知性を湛える「客人」は、本源的に「*敵意*」(*hostility*)の対象となる可能性を霧消できない。すなわち、「*歓待*」と「*敵意*」とは切り離すことができない、一体化した心性と捉えることができよう。『*粋人*』の男に限ったことではないが、「客人」は両価値的な他者であるからこそ、その「*歓待*」の有り難さに触れることもあれば、「*敵意*」の峻烈さに恐怖することもある。婆の表層的な「*歓待*」が一皮むけば、身も蓋もない「*敵意*」に満たされていることを、男は後に思い知らされることになる。

四

婆が男の「極めてまづい洒落」に応えて座敷に呼んだのは、「売れ残り」の「不細工の芸者」だった。この小説のもう一人の登場人物「蕾」である。婆からは、「あれは素性の悪い大馬鹿の客だけれども、お金はまだいくらか持つてゐるやうだから」と「言ひふくめ」られていた。蕾も男と同じく、能弁に自分が置かれている状況を語る。

女は、大晦日の諸支払ひの胸算用をしながらも、うはべは春の如く、ただ矢鱈に笑つて、客に酒をすすめ、

「ああ、いやだ。また一つ、としをとるのよ。ことしのお正月に、十九の春なんて、お客さんにかかはれ、羽根を突いてもたのしく、何かいい事もあるかと思つて、うかうか暮してゐるうちに、あなた、一夜明けると、もう二十ぢやないの。はたちなんて、いやねえ。たのしいのは、十代かぎり。こんな派手な振袖も、もう来年からは、をかしいわね。ああ、いやだ。」と帯をたいて、悶えて見せた。

見せかけとはいへ、苦しい経済状態にもかかわらず「うはべは春の如く」、蓄は「歓待」を演じてみせる。話題は時節柄、年取りに及んだ。元日を迎えれば二十歳、袖脇を塞ぐ日も近いことを思うと振り袖との別れが惜しまれる、という。ところがここで、蓄にとつては全く意外な事態が出来することとなる。

「馬鹿ではあるが、女に就いての記憶は悪強い男」は、二十年前の宴席で同じ台詞を吐き「帯をたたいて」いた蓄のことを思い出し、「氣の詰る年穿鑿」を始めてしまうのである。嘘がばれた蓄は「思はず野暮の高声になつて攻めつける」男に向かつて「何も言はずに、伏目になつて合掌」するほかなかつた。

蓄の嘘に「興覚め」た男は、不穏な空気を読み取った婆から再び「あまりと言へば、あまりの齒の浮くやうな見え透いたお世辞」を浴びせられ、「たすからぬ思ひ」に駆られる。

婆は一步金を押しいただき、

「まあ、どうしませうねえ。暮から、このやうな、うれしい事ばかり。思へば、けふ、あげがたの夢に、千羽の鶴が空に舞ひ、四海波押しわけて万亀が泳ぎ、」と、うつとりと上目使ひして物語をはじめながら、お金を帯の間にしまひ込んで、「あの、本当でございますよ、旦那。眼がさめてから、やれ不思議な有難い夢よ、とひどく気がかりになつてゐたところにあなた、いきなお旦那が、お産のすむまで宿を貸せと台所口から御入来ですものねえ、夢は、やつぱり、正夢、これも、日頃のお不動信心のおかげでございませうか。おほほ。」と、ここを先途と必死のお世辞。

三人の嘘に共通するのは、過度の具体的描写が稚拙な張りぼてのように際立つて見えることである。傍線を付した箇所などは、気恥ずかしいほどのめた取り合わせだが、空に海に「千羽の鶴」と「万亀」とが溢れかえるという図柄はさすがにあくどい。木村小夜はこの場面を境にして、原典とは異なり、「自分の嘘に出鱈目を言つて調子を合わせる婆を却つて持て余すようにな」り、「嘘をついている自分を自覚せざるを得なくなることによつて、その嘘に没頭出来なくなる」男の嘘との向き合い方が変化することに着目する。また、斎藤理生は婆の過剰な「お世辞」のねらいを、「あえて嘘であることが露わな大げさな発言をすることで」、「男の「粹人」物語の虚構性を浮上させてゆく」ことにある。つらい現実とは別のところに自己像を立ち上げようとした男と蓄はともに、化け損なつた者という点において相同的である。できすぎの「不思議な有難い夢」を語り、男の嘘の水準をまねてみせた婆の攻撃性とは対照的に、二人にとって嘘の発覚は攻撃誘発性（被撃性）を伴つていた。そこで二人に課せられるのは、その弱さをどのように乗り越えるかという問題であつた。

共演者であるはずの婆の背信行為にも抗議できない男は、不本意ながら「粹人」の芝居を続ける。婆による「粹転」の演出を黙つて追認し、張り合いのない役柄を務めるのである。「もともとこの男の人品骨柄は、いやしくない」と語られていた人柄のよさは、荒事への転換を不可能にする。一方の蓄は、内情を打ち明け、開き直るといふ道を選んだ。芸者の年齢詐称を咎めるやうな野暮な男に氣遣いは無用とばかりに、単刀直入に要求を突きつける。

旦那は、いよいよ、むづかしい顔をして、

「いまあの婆は、つぼみさん、と言つたが、お前さんの名は、つぼみか。」

「ええ、さうよ。」女は、やぶれかぶれである。つんとして答へる。

「あの、花の蓄の、つぼみか。」

「くどいわねえ。何度言つたつて同じぢやないの。あなただつて、頭の毛が薄いくせに何を言つてるの。ひどいわ、ひどいわ。」と言つて泣き出した。泣きながら、「あなた、お金ある？」と露骨な事を口走つた。

客はおどろき、

「すこしは、ある。」

「あたしに下さい。」色気も何もあつたものでない。

たしかに、いらぬ「年穿鑿」や名にこだわったことは不粹の極みであるとしても、花街で手練手管抜ききの無心をされることを、男は想定していなかったのだらう。「おどろ」くのも無理はない。とはいえ、これからも通い詰めるはずのない男からならば、今ここで有り金をできるだけ多く巻き上げようとするのは、理にかなった目標設定ではあつた。蓄は、「人品骨柄は、いやしくない」が「素性の悪い大馬鹿の客」の機先を制し、家の事情を真率に語り出す。四、五日前のこと、嫁ぎ先から赤子を連れて娘が帰ってきた。結婚して「一年経つか立たないうちに、乞食のやうな身なりで」。「俳諧だか何だかお得意」の「のつぺりした顔」の「亭主」はといえば、「銭湯へ出かけて、それつきり他の女のところへ行つてしまつた」らしい。これという特異なところもない、しかしだからこそ現実味のある哀話である。

「それでは、お前さんに孫もあるのだね。」

「あります。」とにこりともせず言ひ切つて、ぐいと振り挙げた顔は、凄かつた。「馬鹿にしないで下さい。あたしだつて、人間のはしくれです。子も出来れば、孫も出来ます。なんの不思議も無いぢやないか。お金を下さいよ。あなた、たいへんなお金持だつていふぢやありませんか。」と言つて、頬をひきつらせて妙に笑つた。

粹人には、その笑ひがこたへた。

男はまたしても、確かめる必要もないことを問い質してしまふ。その余計な一言は結果的に、蓄のふてくされた態度に凄みを加えることとなつた。傍線部のように、語り手はその表情を精細に追い、気圧される男の心境を想像させる。本来、悪性な「亭主」に捨てられた、乳飲み子を抱える「娘」を救済する責務は、男にはない。それはあくまでも蓄の家の災厄だ。ただ、一見の客であつても、「たいへんなお金持」であれば、その情けでこの窮状を救つてくださるにちがいない、というのが無心の理路である。男の「粹人」気取りを逆手に取つたこの情緒みの申し入れを、男は断ることができない。一方で、気前のよい長

者を演じさせてやるかわりに、その芝居に付き合う手間賃は請求する、という蓄の明示的な底意に「粹人」は晒される。

原典の『世間胸算用』には女の「母親らしき者」が登場し、「是れが顔の見納め、十四五匁の事に身を投げる」と泣きつく場面がある。銀「十四五匁」は一步金一枚（「一角」）とほぼ等価であることから、男に身銭を切らせるためのお決まりの芝居なのだらう。それを嘘と知つて知らずか「一角取らせて」、「心面白う声高に物云ふ」男の「痴人」ぶりが描き出される。では、『粹人』における設定変更の意図とは何だらうか。それは蓄の荒れた感情に根柢を持たせるためだつのではないか。「大晦日の諸支払ひの胸算用をしながらも、うはべは春の如く、ただ矢鱈に笑つて、客に酒をすすめ」ていた蓄の表層的な演技は、年齢をごまかしていたことがばれてからは、婆の「見え透いたお世辞」にも後押しされ、「素性の悪い大馬鹿の客」を相手にした真情の吐露へと切り替わる。男に対して、娘や赤子のこれからを案じる母・祖母としての自己を語り出すとき、結局は金が恨みの種であるという怒りは、いつまでも「粹人」気取りを続ける男への敵意に変わるのである。

五

大晦日の朝、「出違ひ」を図り、花街で一日限りの虚栄心を満たそうとした男はこうして、茶屋の女性たちの「粹転」に遭い、その意のままに操られてしまふ。「粹人」として振る舞うことは、途中から押しつけられた役柄と化し、うつつを抜かすこともままならなかつた。歓待と敵意との間を軽々と越境する婆・蓄の優位は揺るがず、隠然とした支配は続く。

ああ、いまごろは、わが家の女房、借金取りに背を向けて寝て、死んだ振りをしてゐるであらう、この一步金一つでもあれば、せめて三、四人の借金取りの笑顔を見る事は出来るのに、思へば、馬鹿な事をした、と後悔やら恐怖やら焦躁やらで、胸がわくわくして、生きて居られぬ気持になり、

「ああ、めでたい。婆の占ひが、男の子とは、うれしいね。なかなか話せる婆ではないか。」とかすれた声で言つてはみたが、蓄は、ふんと笑つて、「お酒でもうんと飲んで騒ぎませうか。」と万事を察してお銚子を取りに立つた。

西鶴は描かなかった男の苦衷を、太宰は執拗に掘り下げる。「合わせと不合わせとは軒続き」などと、逆境における「堪忍」の大切さを偉そうに説き、「わが家」にひとり残してきた「女房」が不憫に思われてくる。他者を操る／他者に操られるという非対称的な関係を成立させる理念である点において、「堪忍」と「粹人」とは通底している。男は他者を操る立場を保持しようとして、「粹人」の役柄を降りられず、茶屋では手だれの玄人たちによって逆に操られる。何も言い返さなかった「女房」が襲われていたであろう無力感が初めて、「人品骨柄は、いやしくない」男に共有されるのである。「後悔やら恐怖やら焦躁やら」に囚われる男はこのあと、「暗澹、憂愁、やるかたなく」、「つきもない小唄を口ずさんで見たが一向に気持が浮き立たない。これだけ深い反省の只中にも、婆の殊更めいた「畳算」¹⁴ 占いの結果に喜んでみせたり、蓄に鼻で笑われても素知らぬ振りをしたりと、「粹人」の演技はもはや苦行に近いといえる。

元はといえば、嘘をついたことが発端だった。では、三者三様の嘘が渦巻く『粹人』という小説は、はたしてどのような時代性を帯びていたのだろうか。アジア・太平洋戦争期を、須田喜代治がいう「大嘘」の「世界の存在を許さない」「時局」¹⁴と捉えるならば、その陰画として『新釈諸国噺』十二篇の虚構空間はあったのかもしれない。嘘を禁じられた時代、「まこと」や「清明心」の美德が絶讃されていた。

真言即ち真事である。言と事とはまことに於て一致してゐるのであつて、即ち言はれたことは必ず実現せられねばならぬ。この言となり、事となる根柢にまことがある。¹⁵

『国体の本義』

心直くして恥を知り、正を履んでおそれず、きたなき心を捨てて大和心のををしきに就くは、これ日本人本来の面目の發揮である。¹⁶

『師範修身公民』本科用卷一

言行一致を絶対価値とする時代、嘘は「きたなき心」の現れ以外の何ものでもなかった。真善美のすべてを「生み出す根源にはまことのあることを知るべ

きである」と、『国体の本義』は述べて、「まこと」とは「清明心であり、それが我が国民精神の根柢となつてゐる」と結論づける。後者の文章は、「青少年学徒に賜はりたる勅語」(昭和十四年五月)の一節「汝等其レ気節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ」を敷衍した解説文である。日本人は本来嘘をつかないものだ、という理念は少なくとも「堪忍」や「粹人」と同程度に胡乱ではあった。

太宰治が『新釈諸国噺』の刊行に向け、「警戒警報の日にも書きつづけ」¹⁷ていた頃、国民の多くは戦局の悪化を実感していた。荻野富士夫は、民心の把握を任務としていた特別高等警察による昭和十九年の資料に記された「圧戦気分」という用語に注目する。特高の通用語だったと考えられる「圧戦気分」とは、「文字通り戦争のもたらすさまざまな重圧に打ちひしがれつつある状態であり、「戦意」の弛緩や低調と通底する気分であろう」と、荻野は推測し、「一九四四年を通じた国民の生活心理を的確に表現している」と論じる。¹⁸

戦時下にあつては公言できなかった「戦意」の減退という事実は、戦後に発表された当時の日記や手記などで確かめられる。例えば、近衛文麿内閣で内閣書記官長や司法大臣を務めた風見章は、その日記(昭和十九年十月十日)に、「いはゆる必勝の信念の動揺、地方にあつてもいよく大也」と記し、「後日の参考の爲めに」と前書きした同じ月の手記には、「人々は戦争に疲れ出したのである。一戦一敗に心を動かすなどよく呼びかけるが、彼等自身は戦争の成行などはあまり問題にしてゐないのだ。それを問題にするほどの心のゆとりを無くしてしまつてゐるのである」と、現況への批判的見解を述べる。

同じ頃、ジャーナリストの清沢洌も、戦時報道の偏りに憤りを隠せなかった。

ビルマ方面(拉孟、騰越)でまた全滅隊出づ。何人が責任を負わねばならぬのか。しかも新聞をして盛んに「作戦の絶妙」とか「神妙の作戦」とかと毎日書かせている。祖国の守りが危うい時にビルマには何のために行つていいのか。しかも作戦の妙を常に絶讃するのだ。国民の無智も責任あり。²⁰

新聞をはじめとする報道機関はもれなく、度重なる「守備隊」の全滅を「玉砕」と美化してはばからない。清沢洌は「全滅隊」という客観的表現を使うことで、そうした虚飾を指弾する。「新聞をして」「毎日書かせている」主体は、軍部と一体化した戦時下の権力機関「大本営」にほかならない。大がかりな嘘

が常態化していた。現地から報告された「大戦果」を検証もせずに垂れ流し、実質的な敗退を「転進」とすりかえるような情報操作が「戦時」を長引かせた。そして、精神性を孤塁とさせられた「国民の無智」という反知性主義がそれを支えた。国家ぐるみの嘘にうすうす勘づきながらも、「戦意」の低下という心身の反応を示すのが関の山だったことも含めて。戦時体制に即応して書かれ、語られた「グロテスクな嘘」に取り囲まれた時代に『粹人』を置きなおすとき、そこに繰り上げられていた醜悪な嘘の連鎖は、近世の「浪花」における茶屋に仮託した同時代批評という一面を浮かび上がらせるのではなからうか。だとすれば、「粹人」になりきろうとした男の虚栄は、ナシヨナリテイに依存する決戦下の大義と釣り合うことになるだろう。

おわりに

上方で生まれた「粹」という概念はそののち、江戸で「通」と呼ばれるようになる。近世文学研究者の水野稔は、江戸中期の洒落本の作者たちが書き残した「通」論から析出されるその本質を、「内部に豊かに貯えられ満たされたものを、外部にあらわに流出し表出することを抑制する態度」、「充実したもののつつましやかな発現」と解説している。洒落本の嚆矢とされる江戸版『遊子方言』（明和七・一七七〇年刊、田舎老人多田翁作）に登場する「通り者」は、吉原遊郭の事情に通曉する通人を気取るものの、しくじりを繰り返す「半可通」だった。「抑制」とは無縁の饒舌とうぬぼれがことごとく裏目に出るおかしさが人氣を博し、以後しばらくは、半可通や野暮をからかうことが洒落本の定型的な筋立てとなる。

井原西鶴による町人物の浮世草子『世間胸算用』を原典とする『粹人』は、通人氣取りの半可通を笑いのめすという洒落本の趣向を生かした滑稽小説である。そこには、「内部に豊かに貯えられ満たされたもの」を何も持たない男が、虚栄心に突き動かされ、「粹」を精一杯体現しようとする愚かしさ、みじめさが容赦なく描き出されていた。挙げ句の果てには、掛取りに顔を合わせることもなく大晦日の一日をやり過ごすという本来の目的も、「丁稚らしき身なりの若い衆二人」に「下着一枚」を除き、すべてを「お勘定」として持って行かれ、遂行できなかった。

現実から逃避するための嘘が、後に重い負債となることもまた、敗戦という

それほど遠くはない現実への予感から目を背け、根拠のない言説で事実を覆い隠していた「決戦」の時代と響き合う。『粹人』は、自ら構想した物語の中でそれに縛られていく男を笑うことで、「時代」を支配する物語に容喙する小説なのである。

注

- 1 『西鶴置土産』の本文は、新日本古典文学大系『武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西鶴名残の友』（谷脇理史・富士昭雄・井上敏幸校注 平成1・4 岩波書店）による。
- 2 太宰治『粹人』の本文は『太宰治全集』7（平成10・10 筑摩書房）による。原則として、他の引用文も含め、仮名遣いおよびルビは原文のままとし、漢字は新字に統一した。文中の傍線は引用者による。
- 3 『世間胸算用』の本文は、日本古典全集『西鶴全集』第三（與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子編纂校訂 大正15・7 日本古典全集刊行会）による。
- 4 斎藤理生「太宰治『粹人』論——物語・顔・反復」（『太宰治スタディーズ』6 平成28・6）
- 5 木村小夜「太宰治『新釋諸國噺』試論——「赤い太鼓」と「粹人」——」（『叙説』22 平成7・12 『太宰治翻案作品論』第二章『新釋諸國噺』論第八節「赤い太鼓」と「粹人」に加筆収載 平成13・2 和泉書院）
- 6 「思ひかね今日たてそむる錦木の千束も待たであふよしもがな」（『詞花和歌集』巻第七 恋上 大江匡房）と詠まれた「千束」は、男の誠実な恋心の証しとして、女の家門口に毎日一本ずつ立てられた「錦木」の本数を表す。「錦木」は五色に彩られた一尺ほどの木片で、陸奥地方の求婚をめぐる習俗として伝えられ歌語となった。後に、「いろく道ならぬ事を書くどきて。千束おくりけるに、返しもなくて」（井原西鶴『好色一代男』巻二・三「女はおもはくの外の」のように、恋情を綴った手紙の意味で用いられるに至る。
- 7 注4に同じ。
- 8 三木清「虚栄について——人生論ノート——」（『文學界』6・3 昭和14・3）
- 9 アダム・スミス『道徳感情論（下）』（水田洋訳 平成15・4 岩波文庫 二一〇頁）
- 10 注4に同じ。

- 11 エミール・バンヴェニスト『インドヨーロッパ諸制度語彙集 I 経済・親族・社会』（前田耕作監修 蔵持不三也・田口良司・渋谷利雄・鶴岡真弓・檜枝陽一郎・中村忠男共訳 昭和61・5 言叢社 八〇〜九五頁）
- 12 注5に同じ。
- 13 注4に同じ。
- 14 須田喜代次「太宰治「粹人」の〈すゐ〉——「粹ほど愚痴なものなし」——」（『太宰治研究』22 平成26・6）
- 15 『国体の本義』（文部省編纂 昭和12・5 内閣印刷局 五九〜六〇頁）
- 16 『師範修身公民 本科用 巻一』（文部省著作 昭和18・4 師範学校教科書株式会社） 本文は『続・現代史資料（9） 教育 御真影と教育勅語』（佐藤秀夫編 平成7・12 みすず書房 四九五頁）による。
- 17 太宰治『新釈諸国噺』「凡例」（昭和20・1 生活社 三〜四頁）
- 18 荻野富士夫『「戦意」の推移——国民の戦争支持・協力』（平成26・5 校倉書房 一〇〜一一頁）
- 19 『風見章日記・関係資料 一九三六・一九四七』（北河賢三・望月雅士・鬼嶋淳編 平成31・3 みすず書房 二五〇頁、二九六頁）
- 20 清沢冽『暗黒日記』昭和十九年九月二十一日（山本義彦編 平成2・7 岩波文庫 一三三〇頁）
- 21 太宰治は「返事」（『東西』1・2 昭和21・5、原題は「返事の手紙」）の中で次のように、過去を十分に省みることなく、新たな価値観にすばやく順応する人々への嫌悪感を表明した。本文は『太宰治全集』11（平成11・3 筑摩書房）による。
- 私はいまジャーナリズムのヒステリックな叫びの全部に反対であります。戦争中に、あんなにグロテスクな嘘をさかんに書き並べて、こんどはくると裏がへしの同様の嘘をまた書き並べてゐます。
- 22 水野稔『黄表紙・洒落本の世界』（昭和51・12 岩波新書 一〇五頁）